

北海道のさけ・ます

伊澤敏穂

サケと私達とは長く（歴史）、深く（食料・産業）、広い（生態系サービス）関係があります。最も基本的な関係として、関東以北の人々は古くからサケを食べ、好きな人が多いことです。そして最近では安全安心な食材としての再認識や、サプリメントとしても注目されています。

北海道のサケ漁業は、1600年代（江戸時代初期）に始まったと考えられています。その頃は河川内や河口域で漁業が行われ、1700年初頭には石狩川河口で76万尾が漁獲され、北海道の重要な漁場として栄え、その後の内陸開発につながりました。定置網漁業が導入された1800年代になってサケの漁獲量は伸び、最も多いときで1,100万尾(1889年)の漁獲を得ています。

1876年に、さけ・ますの人工ふ化技術がアメリカから日本に入り、1888年に北海道に千歳中央孵化場が建設されました。この頃から日本では自然繁殖を保護する手法から人工ふ化放流の手法を用いたサケ資源の利用に移行し、さけ・ます増殖事業の管理や技術の開発が進みました。当初は、道営孵化場3施設、民営孵化場約40施設で増殖事業が行われ、民営施設の減少や道営から国営（1952年）になるなど大きな変遷を経ましたが、サケの来遊数は約80年もの長い間増加せずに、300-500万尾で推移しました。

1970年に入って北海道のサケ回帰量は飛躍的に増大します。1970年代に約1,000万尾、1980年代に約2,700万尾、1990年代には4,000万尾を超え、現在北海道のサケ来遊量は最近10年間の平均来遊数で5,000万尾を超える高い水準になりました。資源の好転は、「自然をよく知り、尊重し、そして利用する」という大事な視点に気づいたことです。湧水の利用、体力維持のための給餌飼育、そして放流時期を天然

のサケが多く下る時期に行って現在の高い資源水準に達したわけです。ただし、日本のサケが増えていた1980年代に、アラスカの野生ベニザケ等も増大したことから、北太平洋海域の環境が良好だったことも考えられます。

サケ資源は高い水準になった近年でも解決すべき課題が少なくありません。具体的にはサケ資源を安定的に利用していくために、資源構造に関わる課題と生物多様性に関わる課題の取り組み、さらにそこから得られた知見に基づき増殖事業の管理システムの改善や来遊予測技術の精度向上等を図らなければなりません。これら北海道のサケの課題について、北海道の地方試験研究機関が主体的に行うと共に、母川回帰やベーリング海への回遊などサケの生理生態を考え、大学や旧国立試験研究機関とも適宜連携して取り組むことが一層重要となっています。

北海道大学の帰山先生は、地球温暖化によって50年、100年後のサケの分布について予測したところ、2025年までに北太平洋では生息域の縮小が大きいこと、北海道のサケは2050年までにオホーツク海への回遊ルートを失い、2100年までには生存が著しく困難になると述べています。

北海道の人々や動植物に対して多大の貢献をしているサケを、不確実な環境変化に順応しながら持続的な利用をするために、北海道の地方試験研究機関が研究資源を充実させ、機動性を高めて調査研究に取り組む時機になっています。

最後になりましたが、未曾有の災害に見舞われた東北地方の皆様にお悔やみを申し上げるとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。

（さけます資源部長 いざわとしお）